



# 図書館だより



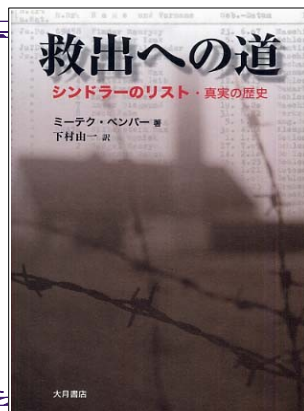
今回の推薦は  
第3学年の  
先生方です!

冬休み直前!今年最後の図書館だよりをお届けします。読書週間特別企画号としても最終回となりました。いろいろな本が紹介されましたが、いかがでしたか?友達同士で、または先生と、そして先生同士でも、図書館だよりで掲載された本についての話題がかわされたとの情報が図書委員の耳に届いています。先日、全国図書館協議会での読書調査結果が発表されましたが、「本を選ぶときの基準は何か?」という問いへの答えは、1位が『本の題名』、2位『表紙』、3位『映画やTVの原作』となっています。本校の場合、この中に「本校先生方からの推薦」という答えが入れば幸いです。ラストを飾る推薦図書は、3学年の先生方11名からのご紹介です。

神永 豊

『救出への道 シンドラーのリスト・真実の歴史』 ミーテク・ペンパー著 大月書店

物事を多角的に見ることは大切です。第2次世界大戦も同様です。本書はヒトラーのナチスドイツ時代、ポーランドの収容所で司令官アーモン・ゲート直属の速記者として、死と隣り合わせの540日を過ごした著者の不屈の精神と勇気と英知の真の物語です。歴史に興味のある人は是非読んでください。日本でも杉原千畝と言う人もいましたよ。



小高 聡

『ホテル・ニューハンプシャー』 ジョン・アーヴィング著 新潮社

もう15回以上読み返している。何かしら傷を持つ家族が、父親のホテル経営に翻弄され、波瀾に満ちた様々な出来事を経験していく物語。この本の作者は突拍子もない人物設定やアクシデントを展開する事で有名だが、この本もまさにその通り。一般的には癒し系ではないが、私には癒しの一冊であり、一番好きな小説だ。



中村 達

『二酸化炭素温暖化説の崩壊』 広瀬 隆著 集英社

二酸化炭素によって地球が温暖化していると言われて久しい。私たちのほとんどがそれを常識として鵜呑みにしている。しかしこの作者は誰もが手に入れられる資料でそれが本当なのかと読者に問いかけてくる。ご都合主義的な感じもするが・・・常識を疑うことが必要なのかもしれないと考えさせられる一冊です。



海老沢 宏子

『きみの友だち』 重松 清著 新潮社

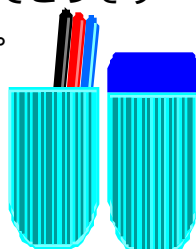
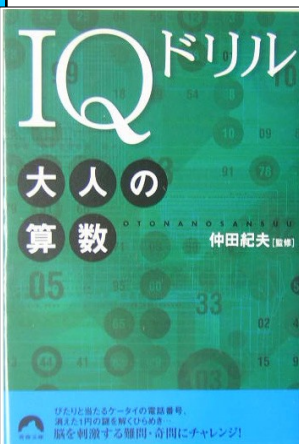


友人とは、友情とは何かを、チョット考えて下さい。『友だちになるときって、その子とずーっと一緒にいたいから、だから、友だちになるんじゃないの。そういう子のことを友だちっていうんじゃないの?それが親友なんじゃないの?』『わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど』

瀬谷 貴光

『IQドリル 大人の算数』 仲田 紀夫著 青春出版社

おもいっきり文系の私が紹介するのは、算数の本です。覚えておくと将来役に立つ?法則がたくさんあります。例えば、電卓の魔術。ある数字を入れると全部9になってしまう数式とか、年齢が分かっちゃう数式など大人にしかわからない算数の楽しみ方がわかる本です。あまり紹介したくはないのですが、しかたがないのでこっそり教えます。

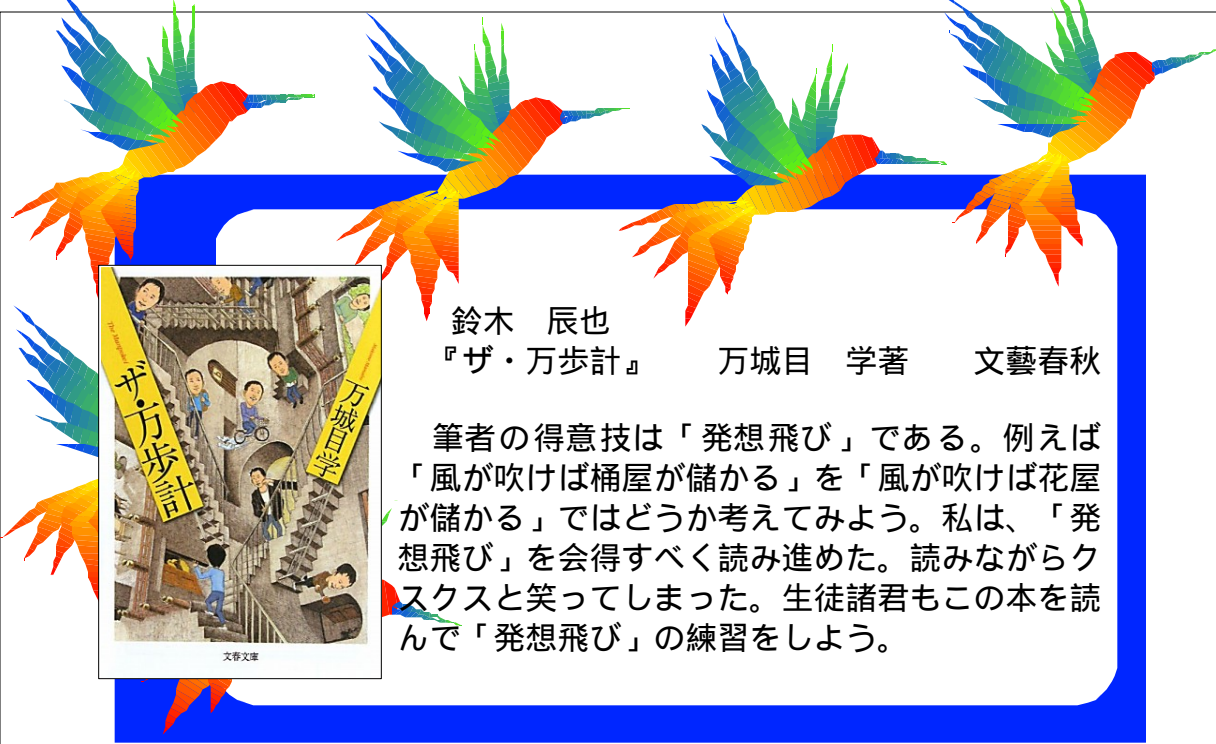


秋山 康夫

『日本語は論理的である』 月本 洋著 講談社選書メチエ

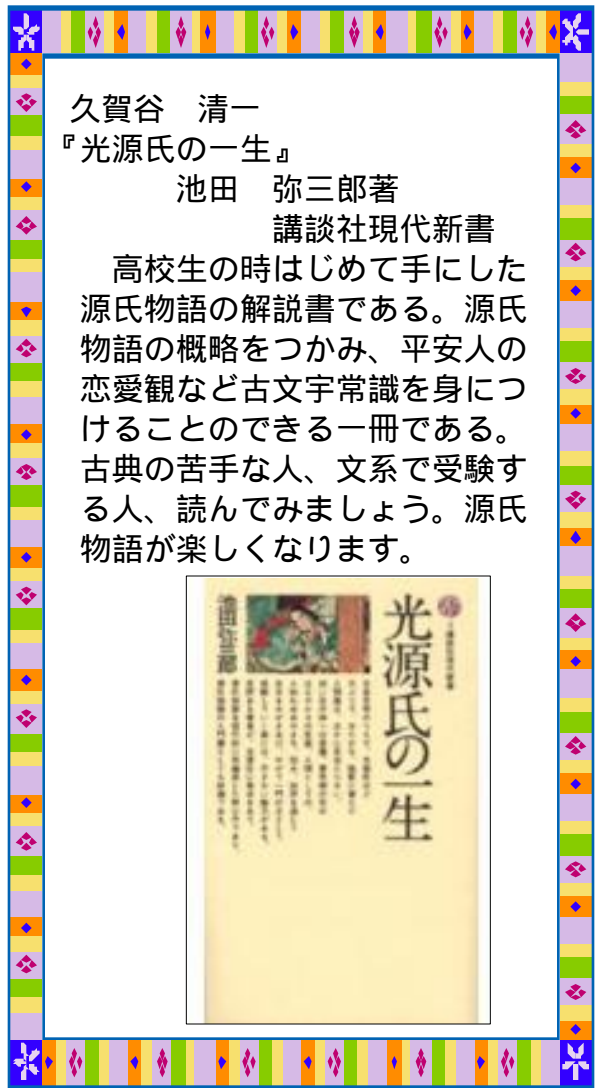
作文を書いたら、先生に「この文には、主語がない」と言われたことない?でも、日本語に主語がなかったら、どうしようもないよね。「川が流れる。」に主語があっても、「川が見える。」に主語はあるのかなあ。同じように「英語は論理的だけど、日本語は非論理的」というのも、あやしい話かもしれないよ。





鈴木 辰也  
『ザ・万歩計』 万城目 学著 文藝春秋

筆者の得意技は「発想飛び」である。例えば「風が吹けば桶屋が儲かる」を「風が吹けば花屋が儲かる」ではどうか考えてみよう。私は、「発想飛び」を会得すべく読み進めた。読みながらクスクスと笑ってしまった。生徒諸君もこの本を読んで「発想飛び」の練習をしよう。



久賀谷 清一  
『光源氏の一生』  
池田 弥三郎著  
講談社現代新書

高校生の時はじめて手にした源氏物語の解説書である。源氏物語の概略をつかみ、平安人の恋愛観など古文字常識を身につけることのできる一冊である。古典の苦手な人、文系で受験する人、読んでみましょう。源氏物語が楽しくなります。



櫻村 敦雄  
『弱虫ペダル(1~14巻、刊行中)』  
渡辺 航著 秋田書店

漫画を読む習慣はなかった。本は読むが漫画は本ではないように思えた。この作品に出会い、その考えは一変した。漫画も立派な本である。しかも、懇切丁寧な図解までついた本である。絵自体はお世辞にも上手いとは言えないが...、その台詞や擬態(音)語はリアル感を増幅させてくれる。悩みは、一巻読むのに二日掛かること。



猪狩 昌行  
『手紙』 東野 圭吾著 文藝春秋



弟を大学に進学させたいと強盗殺人を犯した兄、そして兄想いの弟。そんな二人の絆を描いた作品である。弟は犯罪者の兄弟という理由で差別を受けます。犯罪とは? 現実から逃げることなく強く生きるとは? 人と人との絆とは? 著者のこの作品のねらいは? 映画化された感動の作品である。

安 めぐみ  
『万寿子さんの庭』 黒野 伸一著 小学館

20歳と78歳という年齢差のある女性2人。おかしなやりとりを通して友情が生まれ、2人を取り巻く人たちとのかかわりを交えて物語が進んでいく。ごく普通の現代社会の流れの中で、なぜかなつかしいほっとする内容。高齢者との接し方も深く掘り下げて表現する筆者の意図を汲むと、ただの「癒し系」の話ではないと思う。



図書係  
から  
ひとこと...

「国民読書年」だった2010年...。今年の読書週間でも、こうして先生方からたくさん本をご紹介いただきましたが、図書館にいと、生徒の皆さんからも実にいろいろな本を紹介されます。皆さんから「この本、面白いよ」と今年もっともよく紹介されたのは、有川浩さんの小説でした。恋愛小説なら『植物図鑑』、ドラマ化された『フリーター、家を買う。』、そして「買ってください」と購入希望の多かった最新作『ストーリー・セラー』などなど。本が好き! という読書家さんたちからの情報は、確かであると同時にとても貴重なものだと感じました。そんな情報交換が、図書館ばかりか教室でも家庭でも楽しく行えたらいいですね。来年もいい本にたくさん出会えますように。



もっとも混雑している昼休み1時頃の図書館